

【指導事例6】「国語総合」「読むこと」の領域における言語活動例を踏まえた指導（脚本）

1 「国語総合」「読むこと」の指導事項と言語活動例

（1については「高等学校国語科における指導と評価の在り方に関する研究（中間報告）」と同じ内容）

新学習指導要領（平成21年3月公示）第2章，第1節国語，第2款各教科，第1国語総合の「2内容，C 読むこと」に「(1)次の事項について指導する」として，次の5項目がある。

【指導事項】

- ア 文章の内容や形態に応じた表現の特色に注意して読むこと。
- イ 文章の内容を叙述に即して的確に読み取ったり，必要に応じて要約や詳述をしたりすること。
- ウ 文章に描かれた人物，情景，心情などを表現に即して読み味わうこと。
- エ 文章の構成や展開を確かめ，内容や表現の仕方について評価したり，書き手の意図をとらえたりすること。
- オ 幅広く本や文章を読み，情報を得て用いたり，ものの見方，感じ方，考え方を豊かにしたりすること。

また，「(2) (1)に示す事項については，例えば，次のような言語活動を通して指導するものとする」として，次の4例が取り上げられている。

【言語活動例】

- ア 文章を読んで脚本にしたり，古典を現代の物語に書き換えたりすること。
- イ 文字，音声，画像などのメディアによって表現された情報を，課題に応じて読み取り，取捨選択してまとめること。
- ウ 現代の社会生活で必要とされている実用的な文章を読んで内容を理解し，自分の考えをもって話し合うこと。
- エ 様々な文章を読み比べ，内容や表現の仕方について，感想を述べたり批評する文章を書いたりすること。

「読むこと」の指導事項においては，「表現に即した理解（指導事項ア）」・「文章の解釈（指導事項イ・ウ）」・「考えの形成（指導事項エ）」・「読書・情報活用（指導事項オ）」といった学習の過程に沿った構成がなされている。これは，小学校及び中学校において学習の過程に沿った内容の構成がなされていることを受けるとともに，「各教科・科目等の指導に当たっては，生徒が学習の見通しを立てたり学習したことを振り返ったりする活動を計画的に取り入れるようにすること。（「総則」第5款の(5)）」とも関連している。

こうした改訂の狙いを踏まえ，指導事項と具体的な単元の指導とを対応させ，指導改善を図るために，【資料1】「具体的な評価規準の設定例（読む能力）」の表中「『読む能力』に関する評価規準の設定例」のように細分化した。例えば，指導事項アは，a①からa③までの3事項に細分化しており，

指導事項アから指導事項オまでの5事項全体ではa①からe②までの合計15事項の評価規準例に分割した。実際の指導においては、これらの複数を同時に指導することも多いが、指導事項アの表現に即した理解に関する指導事項を文章の形態によって3項目に細分化するなど、指導の重点を明確化し、「国語総合」の全体を通してバランスの取れた指導となるように細かく設定した。

本指導事例では、単元の評価規準とすることのできる例として、指導事項を基に設定した15事項のそれぞれに対応させて、言語活動に応じた具体的な評価規準の設定例を当てることを原則とする。ただし、a①②③の項目は、文章の形態により細分化した項目であるため該当しない項目がある。また、設定する言語活動は学習指導要領の言語活動例として挙げられているものの中から設定し、教材は現行の「国語総合」の教科書から選定する。

2 文章を読んで脚本にしたり、古典を現代の物語に書き換えたりする言語活動を通した指導

(1) 指導事項と言語活動との整合性

国語総合の「読むこと」の領域における指導事項から設定した15事項に「言語活動例ア 文章を読んで脚本にしたり、古典を現代の物語に書き換えたりすること」を組み合わせたものが、【資料1】の表中にある「言語活動における具体的な評価規準の設定例」である。なお、言語活動例では脚本と設定の変更という2種類のリライトが例示されているが、ここでは脚本を取り上げた。

指導事項が学習の過程に沿った内容の構成となっているため、脚本化という言語活動においても、それぞれの過程に対応した指導を実施することが可能であり、【資料1】における評価規準の設定例では、15項目中11項目について設定例を記載した。b②にある必要に応じて文章を要約することに関する指導も、生徒の実態によっては多くの説話を読んで、そのあらすじや教訓などを簡潔に要約するという学習を設定するという計画であれば、具体的な評価規準を設けることも考えられる。

実際の指導に際しては、年間の指導と評価の計画の見通しによって重点化して取り上げる。

例えば、例とした単元は、「国語総合」の学習の早い時期を想定し、文章から読み取ることのできる内容と食い違いの無い範囲で、想像を広げながら読むことで、文章に込められた教訓や意図を理解させようという構想によっている。しかしながら、「読む必要」に応じて「詳述」する言語能力というのは、こうした想像による者とは別に、論理的な文章の内容を理解し、これを他者に分かりやすく伝えるために「具体例」を補足して「詳述」という能力も包含している。単に、15項目中にあるb③の項目が年間指導計画中に存在するというだけでなく、こうした具体的内容も含めて、年間を通した指導と評価の計画に位置付けられ、重点化を図ることが必要である。

同様に、ここで指導と評価の重点として扱わない事項であっても、例えば、指導事項ウ、オに相当するc③、e③などは読んだ内容と、自分の生き方や考え方を照らし合わせたり、考えを形成したりすることに関する事項であり、軽重の差はあるもののいずれの単元においても学習活動としては設定されることが望ましいと考える。

(2) 教材の選定

指導事項と言語活動との整合性及び、生徒の実態に応じた年間計画における位置付けに配慮し、ふさわしい教材を選定する必要がある。

本指導事例の教材選定に当たって配慮した条件の概要は以下の点である。

まず、高等学校1年「国語総合」の早い段階における単元とすること。

次に、対応する指導事項は、「指導事項イ 文章の内容を叙述に即して的確に読み取ったり、必要に

応じて要約や詳述をしたりすること」を設定すること。

また、上記の指導事項を、言語活動例アにある「文章を読んで脚本にする言語活動」を通して指導するものとし、ふさわしい教材を現在使用している「国語総合」の教科書から選定すること。

以上の点を考えて教材を選定するが、まず「読む必要に応じて詳述」することについて指導するためには、簡潔な表現の文章であって、しかも文章に即した理解の許容範囲が明確であり、更に望むべくは理解に幾つかのバリエーションが許容される教材が適切である。言葉を補って詳しく説明することで、読み手がその文章をどのように理解したかということが如実に表れるのだということを生徒自身が実感する文章が適している。そこで、教科書掲載の定番教材ともいえる次の教材を選定した。

教材 『高等学校 改訂版 標準国語総合』第一学習社
古文入門「児のそら寝」(『宇治拾遺物語』)

古文の入門教材として教科書に掲載されているが、古文学習の初学者にとっては、比叡山という舞台設定や児(ちご)という登場人物の設定にもなじみがないにもかかわらず、両者の心情交流に関する説明のないまま結末を迎えるという説話の書きぶりには困惑を感じる生徒も多く、最終的には指導者のまとめによって理解したつもりになっているということも考えられる。

そこで、「児のそら寝」の前半を脚本化した教材を補助的に用いることで、僧たちが児の「そら寝」に気付いたうえで児に対してふざける気持ちを込めて「な、起こしたてまつりそ」と発言しているのか、それとも「そら寝」には気付いておらず、児の返事の前の間(ま)によってこれに気付いたのかという両様の理解が可能であり、しかもこれは朗読劇という表現に反映させやすい相違である。したがって、設定した指導事項、言語活動に合致した教材であると考ええる。

(3) 単元の計画

- ・単元名 「児のそら寝」を朗読劇の脚本にする
- ・教材 「児のそら寝」『宇治拾遺物語』
(『高等学校 改訂版 標準国語総合』第一学習社)
- ・単元の目標 ・文章の内容を叙述に即して的確に読み取ったり、必要に応じて詳述をしたりする。
- ・単元の評価基準 (一) 古語の意味を理解し、物語の設定や登場人物の行動に込められた価値観を理解し脚本にしたり、朗読劇を聞いたりしている。(b①)
(二) 簡潔に述べられた本文の情景や心理を、脚本の必要に応じて言葉で表現している。(b③)
- ・指導計画 全4時間

時限	学習内容	具体的な評価規準
1	・繰り返し音読し、歴史的仮名遣いに気づく。 ・ペアで音読を確認し合う。 ・ペアで交互に、古文と対応する現代語訳とを音読する。	(該当なし)

2 3	<ul style="list-style-type: none"> グループ活動によって、「児のそら寝」後半を現代語による朗読劇の脚本にリライトする。 前半の脚本に続けて、古文では直接表現されていない、説話としての面白さや人間理解の在り方についてどのように理解したかが伝わるように、ト書きやせりふを執筆する。 グループごとに朗読劇の練習をする。 	<ul style="list-style-type: none"> 古語の意味を理解し、物語の設定や登場人物の行動に込められた価値観を理解し脚本にしたり、朗読劇を聞いたりしている。(b①) 簡潔に述べられた本文の情景や心理を、脚本の必要に応じて言葉で表現している。(b③)
4	<ul style="list-style-type: none"> 朗読劇を発表する。 それぞれの朗読について相互評価し、どのような内容理解が反映されているかを聞き取る。 注意すべき表現（動詞、副詞の呼応、係り結び）が、脚本にどのように反映されているかを確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> 古語の意味を理解し、物語の設定や登場人物の行動に込められた価値観を理解し脚本にしたり、朗読劇を聞いたりしている。(b①)

(4) 学習指導案の例

国語科学習指導案

一 日 時 平成〇年〇月〇日

二 クラス 第〇学年〇組

（「三 単元」、「四 教材」、「五 単元の目標」、「六 単元の評価規準」、「七 指導計画」、「八 本時の目標」、「九 本時の評価規準」は記載省略。単元案参照）

十 本時の指導

・ 4時間中の1時間目

学習段階	学習内容	学習活動	指導上の留意点と評価の実際
導入 (10分)	<ul style="list-style-type: none"> 単元の目標理解 本時の学習目標理解 	①・単元の目標、本時の目標と言語活動について確認する。	<ul style="list-style-type: none"> ①・予習として、本文をノートに視写させておく。 ・評価の観点を基にして、単元の目標を示す。 ・本文を元にして、現代語による朗読劇の脚本を創作し、この説話に描かれている人間理解の在り方が伝わるように朗読劇として演じさせる。脚本化と朗読は6, 7人のグループ活動とする。
展開 (35分)	<ul style="list-style-type: none"> 音読練習による内容理解 	<ul style="list-style-type: none"> ②・説話、比叡山について知る。 ③・繰り返し音読し、歴史的仮名遣いに気づく。 ・ペアで音読を確認し合う。 ・ペアで交互に、古文と対応する現代語訳とを音読する。 ・「おどろく」「おどろかす」の語義を調べる。 	<ul style="list-style-type: none"> ②・説話、比叡山については便覧や教科書の説明などを用いてイメージをもたせる。 ③・範読し、現代仮名遣い等に気付かせたり、文節の区切りを記入させたりする。 ・隣席の生徒とペアで音読練習をさせる。 ・歴史的仮名遣いや現代語と古語とで語義の異なる語に気付かせ、古語辞典で確認させる。

終結 (5分)	・次時の学習内容の確認	④・「児のそら寝」前半の朗読劇脚本を読み、後半の構想にとりかかる。	④・「児のそら寝」前半を脚本化した教材を配付し、後半を構想させる。 【資料2】ワークシート
------------	-------------	-----------------------------------	---

・4時間中の2, 3時間目

学習段階	学習内容	学習活動	指導上の留意点と評価の実際
導入 (5分)	・単元の目標理解 ・本時の学習目標理解	①・単元の目標、本時の目標と言語活動について確認する。 ・クラス全体で音読する。	①・評価の観点を基にして、単元の目標を示す。 ・「おどろく」等の語義を確認させる。
展開 (40分)	・現代語による朗読劇の脚本をグループで創作する。	②・前半が脚本化してあるワークシートに続け、区切りごとに創作する。 ・役割を決めて前半を音読する。 ・せりふの読み方を指定するト書きを工夫する。 ・せりふによって心情を伝えるために、補足の必要な内容を考える。 ③・(3時間目)朗読劇の練習をする。	②・この説話に描かれている人間理解の在り方が伝わるように創作する。 ・クラスを6, 7人のグループに分け、グループ内で相談して脚本化させる。 ・前半の脚本と、後半の「区切り」を設定してあるワークシートを教材として用意し、グループ内で役割を決めて音読させる。 【資料2】ワークシート ・会話文を直訳するだけでなく、心情が伝わるようにせりふに言葉を補わせる。 ・心情変化が伝わるようにせりふを工夫させる。 ・机間指導によって明らかにすべき内容が話し合われていないグループにはヒントを与える。 ★話合いの観察と脚本の内容によって評価する。(b①③)
終結 (5分)	・学習のまとめと次時の学習内容の確認	④・(3時間目)次時の相互評価に用いるシートに、自分たちのグループの表現意図等を記載する。	④・相互評価シートを配付し、自分たちのグループの理解を再確認させ、朗読劇の発表への意欲を喚起する。 【資料3】脚本評価シート ・各グループの脚本を提出させ、控えとグループの人数分用意して、次時の前に返却する。

【資料1】「具体的な評価規準の設定例（読む能力）」

※下線部は「中間報告」からの修正箇所

【学習指導要領】 (1) 次の事項について 指導する。	「読む能力」に関する 評価規準の設定例（15項目）	重 点 化	実 施 時 間	言語活動における 具体的な評価規準の設定例
ア 文章の内容や形態 に応じた表現の特色に 注意して読むこと。	a① 文学的な文章について、内容 と、形態に応じた表現の特色とを 理解して文章を読んでいる。		4	・説話文学における人間理解の在り 方と具体的なエピソードとの関係 を読み取っている。
	a② 論理的な文章について、内容 と、形態に応じた表現の特色とを 理解して文章を読んでいる。			・該当無し
	a③ 実用的な文章について、内容 と、形態に応じた表現の特色とを 理解して文章を読んでいる。			・該当無し
イ 文章の内容を叙述 に即して的確に読み取 ったり、必要に応じて要 約や詳述をしたりする こと。	b① 文脈をとらえ、語句や表現に注 意して、書き手の考えなどを過不 足無く理解している。	○	2 3 4	・古語の意味を理解し、物語の設定 や登場人物の行動に込められた価 値観を理解し脚本にしたり、朗読 劇を聞いたりしている。
	b② 読む必要に応じて、文章を要約 している。			・該当なし
	b③ 読む必要に応じて、文章の一部 を詳述している。	○	2 3	・簡潔に述べられた本文の情景や心 理を、脚本の必要に応じて言葉で 表現している。
ウ 文章に描かれた人 物、情景、心情などを表 現に即して読み味わう こと。	c① 表現に即して、登場人物の、行 動や性格、ものの見方、感じ方、 考え方、ひいては生き方を的確に とらえて、人物個々の心情の変化 や、人物相互の関係の変容を読み 取っている。		2 3	・表現に即して、登場人物の行動や ものの見方を的確にとらえ、児の 心情の変化を読みとっている。
	c② 情景が、人物の心情の反映や象 徴、物事が起こる予兆などとして 設定されていることを理解し、表 現に即して、人物の言動、置かれ ている状況を理解する手掛かりと している。		2 3	・物語の面白さや登場人物の心情を よりよく理解するために、児を取 り巻く情景・時間などの設定の効 果を考えている。
	c③ 登場人物の心情に思いをいた し、自らの生き方と重ね合わせて 共感したり反発したりしている。		2 3	・「僧たち」「児」それぞれの立場に なって、そのときの心情を考え、 これを脚本に反映させている。
エ 文章の構成や展開 を確かめ、内容や表現の 仕方について評価した り、書き手の意図をとら えたりすること。	d① 文章の組立て等の構成と、考え の進め方や内容の推移等の展開 を確かめている。		2 3	・説話として読者の共感を誘う展開 の工夫について確かめ、脚本に反 映させている。
	d② 文章の内容や表現の仕方につ いて、規準や根拠を明確にして判 定している。			・場所や時間の設定がエピソードに おいて効果的であるかどうかを判 定している。
	d③ 段落に注目し、書き手の思考の 流れから強調点を読み取り、執筆 動機や表現意図を考えている。			・該当なし
オ 幅広く本や文章を 読み、情報を得て用いた り、ものの見方、感じ方、 考え方を豊かにしたり すること。	e① 文学的、論理的、実用的文章等 幅広い形態の、多様な内容の文章 を、様々な方法で探して読んでいる。			・「説話」というジャンルに即する作 品を読み、出典と粗筋を記した読 書案内を執筆している。
	e② 本や文章によって得た情報を 選択、評価、加工している。			・「説話」に込められた人間理解、世 界観について具体的な作品と関連 付けて論じている。
	e③ 幅広く本や文章を読み、書き手 の意図をとらえ、読み味わうこ とによって自分なりの考えをもつ ようになっている。			・「説話」に込められた人間理解、世 界観と自分自身の価値観とを関連 付けて論じている。

【資料2】「児のそら寝」脚本執筆のためのワークシート（2，3時間目）

「児のそら寝」朗読劇脚本				
※①から⑩を参考にして、⑥以降のト書きと⑪からのせりふを創作しよう。				
伝えようとしていることが、聞き手に伝わるようにト書きやせりふを工夫しよう。				
No.	本文	ト書き	せりふ	
①	今は昔、比叡の山に児ありけり。	・鐘の音などがするとよい。 ・板張りの広い部屋に僧たちが集まっている。 ・児は部屋の隅でうつらうつらしているという設定。	僧1 僧2 僧3 僧4	「あの子をみてごらん。寝床も敷かないでうたたねしてるよ」 「まったく子どもはどこでも寝るもんだ」 「疲れてるんだよ」 「そうだな。まだまだ小さいのにこの広い寺の中を駆け回っているんだものな」
②	僧たち、宵のつれづれに、「いざ、かいもちひせむ。」と言ひけるを、	・僧たち、座る。 ・僧5はやんちゃな感じ。 僧3は分別のある感じ。	僧5 僧3 僧4 僧5 僧1 僧3 僧2 僧5	「どっこいしょ。まだ寝るには早いが、することもないな」 「学問に終わりはないぞ」 「うるさいことを言うなよ。今日の修行はいつもに増して厳しかった。たまには息抜きもな」 「そうだと。明日もしっかり頑張らなきゃいけないんだから、元気をつけるために、ぼたもちでもつくろう」 「ああ、それはよい。おい、みんな、一緒に作ろう」 「たまにはいいか」 「おれは大きいやつを作るぞ」 「おれもだ」
③	この児、心よせに聞きけり。	・児の声は高めの声で子どもらしく。独白は小さめの声で表現する。 ・児が会話に加わっていないことを表現するために、他の僧たちは互いの発言を受けて発言し合う。 ・僧たちは急に作るようになったぼたもちの材料集めに夢中になっている。	児 僧5 僧2 僧4 僧5 僧1 僧2	（独白）「お坊さんたちがぼたもちを作ろうとしている。うれしいな。僕も分けてもらえるかな。楽しみだな。お腹が鳴りそうだ」 「さあ、米を研ぐぞ。おまえたちは小豆のあんもできるかな」 「急には無理だよ」 「ここに、明日のために煮たのがあるぞ」 「よし。明日のを今から準備して、そっちのを今からちょっと借りておくことにしよう」 「足りない分は大豆を煎ってきなこを作ればいいな」 「よし。豆をもってこよう」
④	さりとして、し出ださむを待ちて寝ざらむも、わろかりなむと思ひて、	・最初はそわそわした感じ、「いい匂い」のところはうっとりした感じで表現。 ・独白なので小さめの声で表現する。	児	（独白）「すごく楽しみだけど、できあがるのを待つて、今日に限って寝ないでいるのも具合が良くないだろうな。どうしよう。ああ、あんなこの煮えるおいしそうなにおいが……。お豆さんを煎るにおいて、なんて香ばしい」
⑤	片方に寄りて、寝たるよしにて、出で来るを待ちけるに、	僧たちが夢中になって盛り上がっている様子を表現する。	児 僧4 僧5 児 僧1 僧2 僧1 僧2 児	（独白）「じゃまにならないように、寝返りのふりをして隅っこに寄ろうかな。よいしょ。ああ、おいしいにおいだ。早くできあがって、誘ってくれないかなあ」 「おっ、小豆もふつついつてきたぞ」 「もっとしっかり つぶしておけよ」 （独白）「ああ、良いにおい」 「おい、熱いうちに粉にひくぞ。臼をもってこい」 「もうここにあるよ」 「よし。豆を落とすぞ。臼を回せ」 「よし。どんどん入れろ」 （独白）「ぼくもお手伝いしたい」
⑥	すでにし出だしたるさまにて、ひしめき合ひたり。	（以下のト書きはグループで書き足すこと）	僧5 僧1	「さあさあ、できたぞ」 「むむ。それでは、器に並べよう。うまそうだな」

			僧4 僧2 僧5	「おお、こいつは俺が食べるぞ」 「それでも良いが、こいつも大きいぞ」 「それでは、皆でいただこうか」
⑦	この児、さだめておどろかさむずらむと、待ちみたるに、		児	(独白)「私にもきっと声をかけてくださるだろう。ああ、温かな湯気、良いにおいだなあ。お腹が鳴るよ。早く起こしてほしいよ」
⑧	僧の、「もの申しさぶらはむ。おどろかせたまへ。」と言ふを、		僧3 僧4	「その前にさて、幼い方も起こしてさしあげよう」 「ああ、そうだな。もしもし。お目覚めませいませ。あなたの分もここにありますよ」
⑨	うれしとは思へども、		児	(独白)「ああうれしい。やっぱり起こしてくれたよ」
⑩	ただ一度にいらへむも待ちけるかともぞ思ふとて、いま一声呼ばれていらへむと、念じて寝たるほどに、		児	「う〜ん。むにゃむにゃ。ぐう」 (独白)「でも、一回でぱっと起きてしまって、なんだか出来上がるのを待ってみたいに思われたらいけないな。今回は寝たまま、もう一度呼ばれてから返事をしよう。さあ、がまんがまん」 「むにゃむにゃ」
⑪	「や、な起こしたてまつりそ。をさなき人は、寝入りたまひにけり。」と言ふ声のしければ、			
⑫	あな、わびしと思ひて、いま一度起こせかしと思ひ寝に聞けば、			
⑬	ひしひしと、ただ食ひに食ふ音のしければ、			
⑭	ずちなくて、無期ののちに、「えい。」といらへたりければ、			
⑮	僧たち笑ふこと限りなし。			
⑯	(「笑い」の後の僧たちと児のやりとりを想像してみよう。)			

★以下の点も脚本化の参考にしよう。

- ⑪……もとのせりふは一人だが、周りの僧の言葉も想像してみよう。
- ⑫……児の心情を独り言にしてみよう。
- ⑬……「むしゃむしゃ」以外に、食べている雰囲気やせりふで表現してみよう。
- ⑭……「ずちなくて」の心情を独り言として表現しよう。
- ⑮……僧たちの笑いつぶりを何人かの言葉として表現しよう。
- ⑯……児は食べながらと思われる。どんな気持ちだろうか。また、僧たちは児にどんな言葉を掛けているだろうか。

【資料3】「児のそら寝」脚本評価シート（3，4時間目）

<p>「児のそら寝」朗読劇脚本評価シート</p> <p>(1) 朗読劇について評価します。</p> <p>※自分たちのグループの内容理解と、表現意図を記入する。(2時間目)</p> <p>※他のグループの発表を聞き、評価を記入する。(3時間目)</p>						
班	僧たちは児の「狸寝入り」に気付いているか。	㊦の発言の声の大きさ	㊧の笑いに込められている心情	古語の口語訳のしかたで気になった箇所	特に工夫の感じられた(工夫した)ところ	総合評価 A~E
1班						
2班						
3班						
4班						
5班						
6班						
<p>(2) 「児のそら寝」の学習を通して学んだことを振り返りましょう。</p> <p>※グループの話合いを通して、この説話が「伝えようとしていること」はどんなことだと考えましたか。</p>						